

論文

# ツォンカパ絵伝に印記された絵解き銘文について

李先才 譲

〔抄録〕

1747年に開板された「15枚からなるツォンカパ絵伝」には、短い文章（絵解き銘文）が印記されている。先行研究ではその詳細は明らかにしていない。本稿では、まず、絵解き銘文の種類や構造を探って、「15枚からなるツォンカパ絵伝」では「全体の配置を示す働き」や「絵画内容や事績順を示す働き」や「事績と直接関連しない他の人名等を示す名札（mTshan byang）としての働き」という三つの特定の働きを持つ絵解き銘文を分析する。つぎに、「15枚からなるツォンカパ絵伝」の典拠と構成を探って、ツォンカパの事績が描かれた絵画内容と事績順を示す絵解き銘文が「作画指示書（Bris yig）」との関係の中で成立したことを提示する。そして、一つの事例を通して、絵伝の読者が元の伝記素材と関連付けて正しく理解するには絵解き銘文は欠かせない重要な素材であることを明示する。

キーワード：ツォンカパ絵伝、作画指示書、絵解き銘文、絵解き

## 0. はじめに

「15枚からなるツォンカパ絵伝」は、1747年に王ボラネー・ソナムトプギェ（Pho lha nas bSod nams stobs rgyas; 1689-1747）の宮殿であるガンデンカンサルにおいて開板されたチベットゲルク派の開祖とされるツォンカパ・ロサンタクパ（Tsong kha pa Blo bzang grags pa; 1357-1419）の絵伝である。

ツォンカパの事績が描かれた各事績場面には、絵解き銘文が印記されている。その大凡の構造は、主語が示されず、どこで何をしたかを示す短文であって、文頭にはウキュ（dBu khyud）という符号と、文字列の後には番号が付されている。先行研究の Tucci 1949 は墨摺りの版画を参考に、絵解き銘文とその番号を頼りに読み続けて計 203 の銘文を翻刻し英語訳してある。しかし、絵画内容などとの対応については明らかにしていない。Yon tan rgya mtsho 1994 と石濱・福田 2008 では、『ツォンカパ絵伝作画指示書』を基に、彩色化された 15 枚の作

品が参照されているが、絵解き銘文の判読不能箇所による混乱や誤読が存在する。王・宗 2017 では、墨摺りの版画を参考に、本来の場面の順序を無視して全作品を左の上部から右へ進むように解釈しており、「15 枚からなるツォンカパ絵伝」全体の配置も無視しているようにみえる。しかし、いずれの先行研究においても、絵解き銘文の種類や構成、そして「15 枚からなるツォンカパ絵伝」の典拠と構成などについてはあまり深く検討されていない。そこで、本稿では、これらの検討を通して、「15 枚からなるツォンカパ絵伝」には絵解き銘文と絵画化された事績場面によってツォンカパ伝の物語の展開を表す典型的な構成を持っていることと、絵伝の読者が元の伝記素材と関連付けて正しく理解するには絵解き銘文は欠かせない重要な素材であることを明示したい。

## 1. 絵解き銘文の構造と種類

「15 枚からなるツォンカパ絵伝」に印記されている絵解き銘文にはいくつかの法則を読み取れる。それらは三つの種類に分けることができるだろう。

第一、各作品の中央上端には、「本尊タンカ」(gTso thang)、「右 1」(g-Yas dang po)、「左 1」(g-Yon dang po) のように連作作品全体の配置を示す計 15 の銘文が銘記されている。それによって、「15 枚からなるツォンカパ絵伝」の配置は、「本尊タンカ」という中央に置く一幅の左右に、各 7 枚ずつの作品が相称するように計画されていることがわかる。(図表 1 参照)

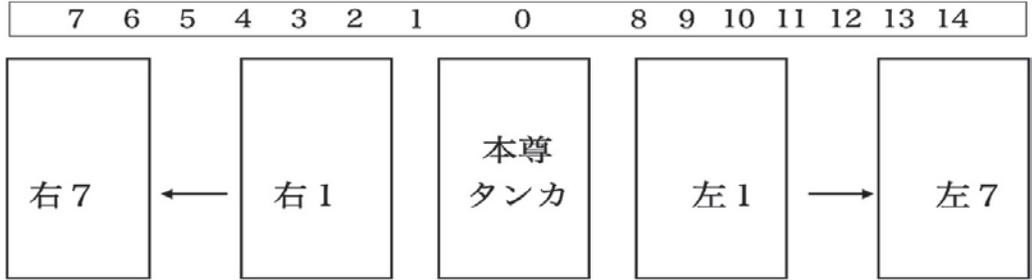
第二、ツォンカパの事績が描かれた絵画内容と事績順を示す銘文が全作品の各事績場面に印記されている。その構造は主語が示されず、どこで何をしたかを示す短文であって、文頭にはウキュという符号と、文字列の後には番号が付されている。例えば、「右 7」の事績場面 1 では

'ol kha rdzing jir rje btsun gyis gsung ltar zhid gsos gyis gsung par rnam sras la 'phrin las bcol ba/ 107

ウルカ〔地方の〕ジンチ〔寺〕において、聖〔文殊菩薩〕のお言葉通り、修繕しなさいとおっしゃったことに応じて毘沙門天に御加護を願った図。百七番。

のような記述方法である。この文字列の特徴については以下で再度述べることにはしたい。連作作品全体の配置については前述した通りであるが、文字列の後に付されている番号を順に追ってみると、ツォンカパの事績順は、「本尊タンカ」から直ぐ右の「右 1」の作品へ、それから「右 7」まで連続し、その後は「左 1」の作品に戻って、「左 7」で終わるように配置されたことがわかる。同時に、各作品の中の場面構成も、各作品の下手の下部からはじめ、時計回りの順に計画されたことがわかる。(図表 1 と 3 参照)

第三、ツォンカパの事績と直接関連しない人名も銘記されている。例えば、「右 7」の下手の下部では、



図表 1

chos rgyal bsod nams stobs rgyas jun wang la na mo/ 'gyur med ye shes tshe brtan la na mo/  
'gyur med rnam rgyal rdo rje la na mo/

法王・ソナムトプギェ郡王に恭敬する。ギュルメ・イエシェツェテンに恭敬する。ギュルメ・ナムギェドルジェに恭敬する。

のように、ポラネー・ソナムトプギェにまつわる銘文が銘記されている。(図表 3 参照) また、同じく「本尊タンカ」でもツォンカパの直弟子 16 名の名前が銘記されている。(図表 2 参照)

このように「15 枚からなるツォンカパ絵伝」では、「全体の配置を示す働き」(「銘文 A 類」と略) や「絵画内容や事績順を示す働き」(「銘文 B 類」と略) や「事績と直接関連しない他の人名等を示す名札としての働き」(「銘文 C 類」と略) 等構造と働きが異なった三類の銘文が記されている。

本稿では、これら三つの中で第二の「絵画内容や事績順を示す銘文 B 類」を主に論ずることにした。

## 2. 「ツォンカパ絵伝」の典拠と構成

「ツォンカパの伝記」とは、ツォンカパの生涯にわたる事績を記録したものであろうが、最初期に著された「ツォンカパの伝記」には、ツォンカパ自身が晩年に自らの生涯の出来事を略述した「自伝」『私の物語の略説』(*Rang gi rtogs pa brjod pa mdo tsam du bshad pa*) と、ツォンカパの直弟子のケートアップジェ・ゲレクペルサン (mKhas grub rje dge legs dpal bzang; 1358-1438) とトクデンパ・ジャムベルギヤムツォ (rTogs ldan pa 'jam dpal rgya mtho; 1356-1428) が著した「伝記」がある。直弟子による「伝記」にも、年次や四季の学期順を追ってツォンカパの生涯を記録した「一般伝記 (thun mong gi rnam thar)」と、ツォンカパの神秘体験を記した「特殊伝記 (thun mong ma yin pa'i rnam thar)」がある<sup>(1)</sup>。時代が下って来ると、こうした「一般伝記」や「特殊伝記」という区別がなくなって、統合した編集や肉付けをした伝記類が仏教史 (Chos 'byung) 等で数多く見られる。

18世紀に「ツォンカバ絵伝」を制作することにあたって、大学者ジャムヤンシェーペードルジェ（Jam dbyangs bzhad pa'i rdo rje; 1648-1721）がそれまでの様々な伝記を整理し取捨選択して、伝記と絵伝との仲立ちの役割を果たす「作画指示書」を著している。それは『大尊者ツォンカバ絵伝の百五十三の出来事、如意宝珠の連なり、牟尼の教えが広開する大安楽の遊戯海』（*rJe btsun Tsong kha pa chen po'i rnam thar ras bris kyi tshul brgya nga gsum pa cintā ma ni'i phreng ba thub bstan rgyas byed phan bde'i rol mtsho chen po*. 『ツォンカバ絵伝作画指示書』と略）という書で、その後書きで

'jam dbyangs bzhad pa'i rdo rjes rnam thar ras bris chen mo 'bri tshe mkhas grub thams cad mkhyen pa'i rnam thar dad pa'i 'jug ngogs dang gsang ba'i rnam thar/ ches cher gsang ba'i rnam thar gsum dang / grub pa'i dbang phyug legs bzang pa'i rnam thar rab gsang rmad byung dang / 'jam dbyangs dang dngos su mjal ba'i rtogs ldan 'jam dpal rgya mtsho'i zur 'debs dang / mkhas dbang gung ru rgyal mtshan bzang po'i rtogs brjod 'grel pa legs bshad sgron me dang / gnas rnying kun dga' bde legs kyi phyi dang gsang ba'i rnam thar gnyis ka tshang ba'i dad pa'i 'jug ngogs dang / 'jam dbyangs kha che'i tsong kha brgyad bcu sogs kyi rnam thar dang / rang phyogs kyi khri rin po che rin chen 'od zer dang las chen kun rgyal/ mkhas dbang pañ chen bsod grags/ pha bong kha pa dpal 'byor lhun grub dang / mkhar nag pa sogs kyi chos 'byung du ma dang / deb sngon sogs rang gzhan gyi chos 'byung du mar brten nas go rim sogs legs par bsgrigs pa 'dis kyang kun mkhyen rgyal ba'i bstan pa spyi dang / khyad par 'jam mgon tsong kha pa chen po'i bstan pa sgo thams cad du dar zhing rgyas la yun ring du gnas par gyur cig// (L. pp. 26a4-b3)

ジャムヤンシェーペードルジェが〔ツォンカバの〕大絵伝を描かせる際に、一切智者ケートゥブ〔ジェ・ゲレクペルサン〕による〔ツォンカバの〕伝記『信仰入門』や『秘密の伝記』、〔そしてトクデンパによる〕『極密なる伝記』の三つと、聖者レクサンパによる伝記『極密の伝記』<sup>(2)</sup>、文殊菩薩と実際に出会ったというトクデン・ジャムペルギヤムツォによる『補遺』（『善説蒐集』）、博学者ゲル・ギェルツェンサンポによる『御業績の解説、善説灯明』<sup>(3)</sup>、ネニン・クンガーデレクによる一般伝記と秘密の伝記の両者が揃っている『信仰入門』<sup>(4)</sup>、ジャムヤンカチェによる『ツォンカ〔パ尊者の〕八十の御業績』<sup>(5)</sup>等の伝記と、自派のお座主であるリンチェンウセルとレーチェンクンギェ<sup>(6)</sup>、賢者パンチェンソタク<sup>(7)</sup>、パウオンカバ・ベルジュルンタク<sup>(8)</sup>、カルナクパ等による多数の仏教史と、『青史』<sup>(9)</sup>等自派や他派の仏教史を基に順序等をよく整えた。これ（この功德）によって一切智者たる勝者の教え（仏教）の全てと、特に文殊菩薩に守護された大〔尊者〕ツォンカバの教えが全ての方面に行き渡り、繁栄して末永く存在しますように。

と記述されているように、この「作画指示書」はツォンカバの伝記類や仏教史類に基づき、ツォンカバの生涯にわたる事績を体系化したということがわかる。実際、本文中でも文頭に番

号が付された合計 153 の文章が列記されている。

『ジャムヤンシェーペードルジェ伝』を見てみると、

'di lo(dgung lo nga brgyad pa shing bya'i lo/p. 98a4)rje rin po che'i nram thar rgyas pa bzhengs  
rtses mzdad nas tshal gyi lha bris pa 'di snga sor yang thugs rgyus yod pas skad btang/ sku  
mdun la yongs(yong?) pas/ rje'i nram thar snga sor gyi 'di bsdus song/ 'di las rgyas pa cig  
bzhengs dgos gsungs/ lha bris rnam la bkod pa sku mdun nas gngang na bzhengs thub zhus nas/  
rje 'di rang gis bkod pa mdzad nas nram thar brgya dang gsum (brgya dang nga gsum ?) ma zhal  
thang bcu gsum la tshul pa byas bzhengs. (L. pp. 102b4-6)

今年〔御年五十八歳乙酉（1705）年〕、尊者（ツォンカパ）の「広伝記」（絵伝）を制作しようと思つて、ツェル〔地方〕のこの絵師とは以前からも知り合ひだったので要請した。〔絵師がジャムヤンシェーペードルジェの〕御足下に来たので、「以前に描かれた尊者（ツォンカパ）のこの伝記は略した物で、これより詳しいものを制作する必要がある」と〔ジャムヤンシェーペードルジェが〕おっしゃった。「絵師たちに、御自身による図像配置の指導がなされたなら、制作しやすいのだが」と〔絵師達から〕お願いして、この尊者（ジャムヤンシェーペードルジェ）御本人が指導をなさつて「伝記百五十三」（『ツォンカパ絵伝作画指示書』）を十三枚のタンカに収まるように制作された。

と記述されている。これで『ツォンカパ絵伝作画指示書』は 1705 年に編集されたことがわかる。ジャムヤンシェーペードルジェ本人が絵師たちに指導を与えて、最初に制作された絵伝は「13 枚からなるツォンカパ絵伝」であることもわかる。

本論で扱う「15 枚からなるツォンカパ絵伝」については『パンチェン六世伝』で

me yos lo zla gnyis pa'i tshes drug la mi dbang jun wang bsod nams stobs rgyas sku gshegs/(中略)zla ba bzhi pa'i tshes gsum la dga' ldan khang gsar nas tsong kha brgyad cu'i par gsar brkos  
gngang pa'i par phud dang 'phags pa lo ke shwa ra'i 'dra lcog sku brnyan bcas 'bul mi nams la  
phyag dbang dang/ (TX. pp. 65a6-66a1)

丙申（1747）年二月六日に、君主たる郡王ソナムトプギェ（ポラネー）が崩御した。…中略…。四月三日にガンデンカンサルにおいて「ツォンカ〔パ尊者の〕八十の業績」の新たな版木が彫られたその最初の墨摺りの版画や聖世自在菩薩の尊像等を献上する者達に〔パンチェン・ラマが〕接手儀式を行い、そして…中略…。

と記述され、また同書で

zla ba brgyad par(中略)wang da las bā dur gyis ston pa'i 'khrungs rabs rtogs brjod dpag bsam  
'khri shing dang rje bla ma tsong kha pa chen po'i nram thar tsong kha brgyad cu/ 'phags pa'i  
gnas brtan bcu drug gi zhal thang gi par shing bcas 'bul mi ched rdzong gngang bar phyag dbang  
gngang pa dang zhu yig gi bka' lan bcas stsal/ (TX. p. 67b3-4)

〔1747 年〕八月に、…中略…。郡王ダライバートル（ギェルメ・ナムギェドルジェ）が

『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』と「大尊師ツォンカパの伝記・ツォンカ〔パ尊者の〕八十の業績」と「聖十六羅漢」等のタンカの版木を献上し、特使に〔パンチェン・ラマから〕接手儀式が行われ、奏上の栄誉を賜った。

と記述されている。この記述だけでは、当時制作されたのは「15枚からなるツォンカパ絵伝」であったかどうかは判断できない。しかし、「15枚からなるツォンカパ絵伝」の「右7」の下部にポラネーの業績が描かれている<sup>(10)</sup>ことと合わせて考えると、1747年にポラネーの宮殿であるガンデンカンサルにおいて開板されたのは「15枚からなるツォンカパ絵伝」であることが明らかである。もちろん、1705年に編集した『ツォンカパ絵伝作画指示書』ではポラネーに関する記述は記されていない。そのため、ポラネーの業績が描かれた場面は「15枚からなるツォンカパ絵伝」で新たに加えられたことになる。

一方、『ツォンカパ絵伝作画指示書』の冒頭には場面構成に関する記述がある。

bla ma 'jam dbyangs dbyangs can ma la phyag 'tshal lo// 'dir rje bdag nyid chen po'i nram thar zhal thang dang por/ gtso bo rje rin po che chos 'khor gyi phyag rgya can seng khri rgyab yol rgyan drug sbrag pa can g-yas su rgyal tshab dang 'dul 'dzin/ g-yon du mkhas grub rje tsha kho dbon po/ de'i steng gi g-yas g-yon du dag pa nram brgyad/ 'og tu dge 'dun grub pa 'jam dbyangs chos rje/ byams chen chos rje sher seng sogs/ mdun du mchod sphrin lha tshang dbang sogs dang/ ka l/steng du(中略)(L. p. 1a1-3)

尊師、そして文殊菩薩及び弁財天に敬礼する。ここで大恩尊師（ツォンカパ）の伝絵の一番目のタンカにおいて、主尊として大尊者リンポチェ（ツォンカパ）が転法輪印を示し、獅子座で、背後は六霊捧座（khri rgyab drug 'gyogs）<sup>(11)</sup>で飾ったもの、〔主尊の〕右横にギェルツァブ〔ジェ・タルマリンチェン〕（1364-1432）と持律者〔タクパギェンツェン〕（1374-1434）、左横にケートゥブジェ〔ゲレクペルサン〕（1358-1438）とツァコボンポ〔ケンチェン・ガワンタクパ〕（生没年不明）〔を描くべき〕その上部の左右には清らかな八人の随行<sup>(12)</sup>、その下部にはゲンドゥントゥブ（1391-1474）とジャムヤンチュージェエ〔タシベルデン〕（1379-1449）、シャムチェンチュージェエ〔シャキヤ・イエシェー〕（1354-1435）、シェーラプセンゲ等と、眼前には多数の供養物や神々や梵天やインドラ等〔を書くべき〕と、一番。上部には…中略…。

とそれまでは番号をつけないように記述している。この直後から「一番。上部には…」とみえるように、ツォンカパの前世の話から亡くなるまでの事績を順に番号が付された合計153の文章が記述してある。しかし、番号付けの文章では各場面の中の詳細な構成に関する記述はほとんど記されていない<sup>(13)</sup>。

「13枚からなるツォンカパ絵伝」の「一番目のタンカ」はこの記述に沿って構成されたのであろうが、「15枚からなるツォンカパ絵伝」の「主尊タンカ」もおよそ同じ構造をとっている<sup>(14)</sup>。また、その絵解き銘文も『ツォンカパ絵伝作画指示書』の記述に即して番号が付され

ていない部分では名札のみを銘記し、「一番。上部には…」と番号が付されている部分から絵伝でも番号が付されている。(図表2参照) そのうえ、絵解き銘文と「作画指示書」の番号が付されている文章両者を突き合わせて検討してみたところ、ツォンカパの事績が描かれた場面の「銘文B類」は「作画指示書」の順序を順序としては忠実に守っているものの、「作画指示書」の計153の文章が計203の「銘文B類」になって、細分化され増加している。このように絵画場面も細分化されることによって「13枚からなるツォンカパ絵伝」が後に「15枚からなるツォンカパ絵伝」になっていく原因を作ったと思われる。

さて、「15枚からなるツォンカパ絵伝」を制作する際に『ツォンカパ絵伝作画指示書』を参考に行っていることは明らかである。「13枚からなるツォンカパ絵伝」の現存が現時点で確認出来ていないが、参考に制作されていたことが十分想起される。

まとめると、1705年に「ツォンカパ絵伝」を制作するために、それまでの諸伝記を取捨選択し、整理して『ツォンカパ絵伝作画指示書』が著した。これに基づいて最初に作成された絵伝は「13枚からなるツォンカパ絵伝」であるが、「15枚からなるツォンカパ絵伝」では『ツォンカパ絵伝作画指示書』と「13枚からなるツォンカパ絵伝」の両者が参考に制作されたと考えられる。

次に、「右7」の事績場面4(図表3参照)を事例として、「銘文B類」の構成と特徴について考察することにした。

### 3. 「銘文B類」の構成と特徴

ツォンカパの事績が描かれた絵画内容と事績順を示す「銘文B類」の「百十番」と『ツォンカパ絵伝作画指示書』の文章「八十四番」はツォンカパ絵伝の「右7」の事績場面4に当たる箇所である。その絵解き銘文は

lho brag dra bo dgon par mkhan chen dang mjäl so sor 'jam dbyangs phyag rdor du gdzigs snang byung ba/ 110

ロダク・ダオ寺で大僧院長(ナムカギェルツェン)とお会いになった、それぞれ文殊菩薩と金剛手菩薩に見えた図。百十番。

という「銘文B類」が印記されている<sup>(15)</sup>。文末の番号による働きについては既に述べた通りである。この文章に関する背景の物語を知らず、当該の場面のみに限って見てみると、誰がロダク・ダオ寺で大僧院長と出会ったかわからない。そして「それぞれ文殊菩薩と金剛手菩薩に見えた」ということも詳細な様子は判断できないだろう。ところで、『ツォンカパ絵伝作画指示書』で記述される当該の文章「八十四番」を見てみると、

(ye 84) bra'o dgon par phyag phebs/ der mkhan chen phyag rdor pa yang bsu ba la byon pas/ rjes gsang bdag gtum po 'jigs pa gcig tu gdzigs/ mkhan chen gyis rje 'di pa 'od kyi dra bas

mdzes pa'i 'jam dbyangs gcig bzhengs nas phebs pa gdzigs shing me tog gi char dang/ 'ja 'od kyis phyogs kun khyab par gyur/ (L. pp. 9b5-10a1)

八十四番。ダオ寺にお出ましになった。そこで大僧院長チャクドルワも出迎えに来たので、尊者(ツォンカパ)は〔ナムカギエルツェンを〕忿怒形の金剛手菩薩の一人とご覧になった。〔一方〕大僧院長は〔ツォンカパを〕御光に包まれた文殊菩薩の一人が歩いて来られるのをご覧になり、〔その時〕華の雨〔が降り〕そして、あらゆる方向が虹で包まれるように見えた。

とより詳細な情報が記述されている。『ツォンカパ絵伝作画指示書』からさらに遡って当該箇所  
の原典を見てみると、その記述はツォンカパと同時代の直弟子達が著した諸伝記では確認が  
出来ず、ロダク・ナムカギエルツェン (lHo brag nam mkha rgyal mtshan; 1326-1401) が著した  
とされる『ロダクの大行者とお会いになった時の様子』(lHo brag grub chen dang mjal tshul) で、

bdag gis lo bdun cu lon dus/(中略)bcom ldan 'das kyis chos kyi 'khor lo bskor ba'i dus/lug zla'i tshes bzhi'i nyin lho brag gro bo dgon par phyag phebs byon pa bdag gis bsu ba la phyin pas/rje btsun 'jam dbyangs 'od kyi dra bas mdzes pa zhig phebs byung ba mthong/ khong gis bdag phyag na rdo rje dngos su gzigs shing/ de'i gsus pa'i dkyil 'khor shin tu ldir zhing Vaiḍūrya ltar dwangs pa la sbrul sngo khras spras par gzigs 'dug / (D. pp. 2a1-b2)

私(ナムカギエルツェン)が七十歳(1395)になった時<sup>(16)</sup>のことである。…中略。世尊が法輪を転ぜられた時と同じ六月四日に〔ツォンカパが〕ロダク・ダオ寺にいらっしやるのを私は出迎えに行った。その時、御光に包まれた聖文殊菩薩のようなお方がお越しになったのを見た。彼の方(ツォンカパ)は私が金剛手菩薩そのものとご覧になった。そして、その丸い腹が実にでっぷりとして、〔その色が〕ヴァイドゥリヤのように鮮やかで、青い斑の蛇が巻き付いている〔如き姿〕をご覧になったのである。

と記述されている。これによって、「銘文B類」とは直接『ツォンカパ絵伝作画指示書』を元に作られたことがわかる。しかし、「銘文B類」ではその肝要点のみを示し簡略化した特徴があるため、当該箇所でも『ツォンカパ絵伝作画指示書』や『ロダクの大行者とお会いになった時の様子』で記述される背景の物語を知らない者には十分な理解はできないという特徴が読みとれる。

#### 4. 「右7」の事績場面4の絵像解析

この場面(図4)では、下手で僧形の二名と、菩薩形の尊像を合わせて三名が上手に向かっている。彼らと対面して僧形の三名と、忿怒形の尊像を合わせて四名がいるように描かれている。



図4 (向かって右の図は筆者作成)

菩薩形の尊像は髻を結び、宝冠・胸飾・臂釧・腕釧などの装飾品をつけ、天衣をかけ、下半身に裙を着けており、両手は胸前で何らかの印相を結びながら、右横に直立した蓮の花の茎を持ち、その上に経本と剣が載せられている。一般的には剣と経本は文殊菩薩の持物とされるため、ここで描かれているのも文殊菩薩であろう<sup>(17)</sup>。

対面して立つ、忿怒形の尊像は、顔は忿怒を表し、三眼である。髪の毛先は立って燃えるように描かれ、天衣をかけ、上半身は裸で、下半身に動物の皮を纏っている。宝冠・胸飾・臂釧・腕釧などの装飾品をつけている。右手で金剛杵を持ち、左手は期剋印を結ぶように描かれている。これは忿怒形の金剛手菩薩の特徴である<sup>(18)</sup>。

さて、上述した文献素材（『ツォンカパ絵伝作画指示書』や『ロダクの大行者とお会いになった時の様子』）から考えると、この文殊尊像はツォンカパで、金剛手尊像はロダク・ダオ寺の大僧院長ナムカギェルツェンであることが判断できる。作画構成者がここで描こうとしたのは「ツォンカパとナムカギェルツェンのそれぞれだけが相互に他方を文殊菩薩と金剛手菩薩のように見た」という彼ら二人の想念上の情景であり、この場面ではそれが描かれているのである。このことは、近侍者の僧侶達の表情からも見てとれる。ここで僧侶たちも文殊菩薩と金剛手菩薩のように見たのであれば、合掌や驚くような動作を示すように描かれたのであろう。しかしそうは描かれていない。おそらく、僧侶達が見た二人は普通の姿であることを表現しているのであろう<sup>(19)</sup>。また、ナムカギェルツェンに近侍する僧侶の中で、一人は一本の木製香炉棒（柄香炉）を持っているように描かれている。これは引僧で、ツォンカパを迎えに来ていることが表わされているのであろう。つまり、この場面では想念上の情景と現実の情景が混在して描かれている。

このように、「銘文B類」の詳細な情報が記述された文献素材を読んだ者には、ここで描かれている絵画内容も無理なく理解できる。逆に、背景の物語を読んでいない場合、絵画作品には、略した短い銘文しか印記されていないため、簡単には理解出来ないだろう。つまり、「銘

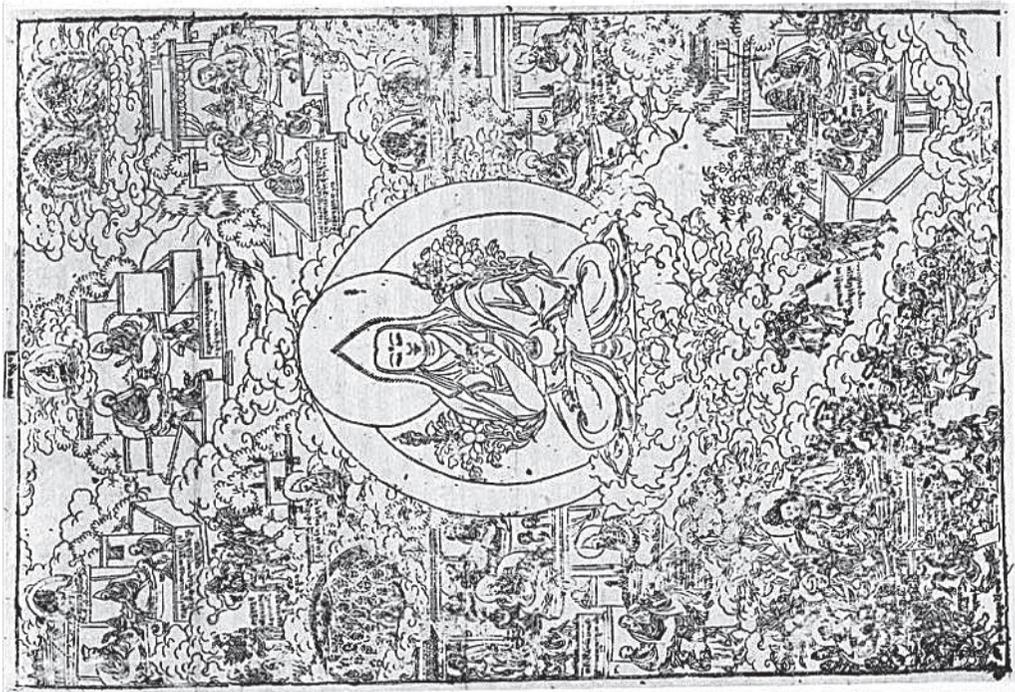
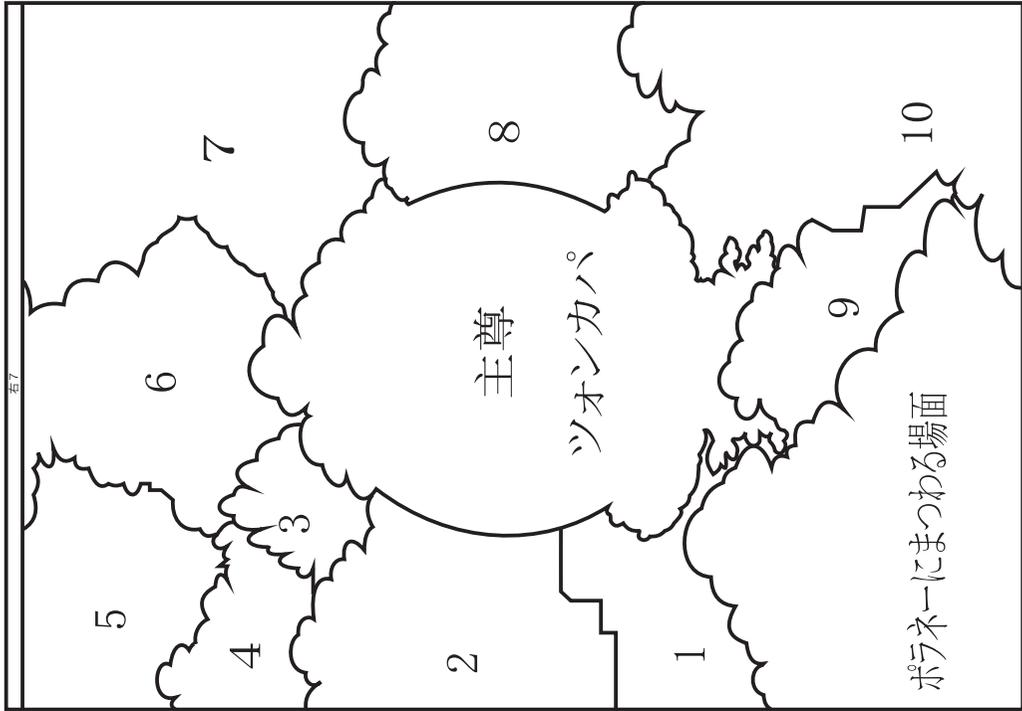
文B類」で仲介される「作画指示書」や他の伝記資料を通してのみ正しくツォンカパの事績場面の情景が伝わるのである。

一方、絵伝の鑑賞者の立場から考えると、既に諸伝記の概要を知っている者には、印記された短い銘文から「どこで何をしたか」の情報を得たことによって、その背景の物語を頭に想起しやすく、おぼろげな記憶をより確かな記憶へとする働きをなすだろうと思われる。しかし、伝記の概要を全く知らない一般の参拝者の場合には、絵解き者（Bla ma ma ni ba）によって「絵解き」をしない限り、正しく理解することが出来ないだろう。つまり、元の伝記素材から正しく理解するには両者とも絵解き銘文は欠かせない重要な素材であるといえるだろう。

## 5. 結論

まず、「15枚からなるツォンカパ絵伝」に印記された銘文の働きから、「全体の配置を示す働き」、「絵画内容や事績の順を示す働き」、そして補助的に「事績と直接関連しない他の人名等を示す名札としての働き」の三類が記されていることが明らかにした。次に、「15枚からなるツォンカパ絵伝」は『ツォンカパ絵伝作画指示書』と「13枚からなるツォンカパ絵伝」を参考に構成されたことを推定した。そして、『ツォンカパ絵伝作画指示書』の順序を順序として絵解き銘文の順番が体系化し、その文章も『ツォンカパ絵伝作画指示書』に基づいて作られた略文であることを明示した。考察の結果、絵解き銘文は絵伝には欠かせない重要な素材であり、絵伝の読者が元の伝記素材から正しく理解する懸け橋になっているとも言えるだろう。





図表3 ツオンカバ絵伝の「右7」

〔注〕

- (1) ケートゥブジェによって『大尊師ツォンカパの素晴らしく希有なる伝記、信仰入門』(*rJe btsun bla ma tsong kha pa chen po'i ngo mtshar rmad du byung ba'i rnam par thar pa dad pa'i 'jug ngogs*. 『信仰入門』と略) という伝記と、『大尊師の海の如き秘密の伝記の中からほんの一部を完全に解説する話、宝の穂』(*rJe rin po che'i gsang ba'i rnam thar rgya mtsho lta bu las cha shas nyung ngu zhiq yongsu brjod pa'i gtam rin po che'i snye ma*. 『秘密の伝記』と略) という二つの伝記が著されている。その文章中で前者が後者を「特殊伝記 (*thun mong ma yin pa'i rnam thar*)」と呼び、後者が前者を「一般伝記 (*thun mong gi rnam thar*)」と呼ぶ例がしばしば出てくる。例えば、前者の中で「しかし、大衆に公言することは許されていないため〔ここに〕記していない。しかし、概略を少し理解できるぐらいは〔ツォンカパの〕「特殊伝記」(『秘密の伝記』) で語っておいたのである。(‘on kyang tshogs su bsgrags par ma gnang bas ma bris la/ cung zad brda go bar nus pa tsam zhiq rnam par thar pa thun mong ma yin par brjod zin to/D. p. 68a5-6)」と記し、後者の中で「師ウマバとお会いになるまでの伝記は「一般伝記」(『信仰入門』) において既に述べた通りである (*bla ma dbu ma pa dang mjal ba yan chad kyi rnam par thar pa ni thun mong bar brjod zin pa ltar ro/D. p. 2b2-3*)」として、相互にこの呼び方が用いられている。

内容も、前者では年時や年齢を明記した事例は稀でありながら、ほとんどの展開は四季の学期順に応じて何処で何を行ったかを示す記述方法である。後者では、神秘的な情報が多く、ツォンカパの夢や瞑想中に現れてきた様子を記述することが多い。

トクデンパによって『信仰入門』と『秘密の伝記』の内容を補遺する形で『尊者ツォンカパの大伝の補遺、善説蒐集』(*rJe btsun tsonq kha pa'i rnam thar chen mo'zur 'debs roam thar legs bshad kun 'dus*. 『善説蒐集』と略) という伝記と、『尊師の極密なる伝記、素晴らしく希有なる物語』(*rJe'i rnam thar shin tu gsang ba ngo mtshar rmad du byung ba'i gtam*. 『極密なる伝記』と略) という伝記が著されている。何れも貴重なツォンカパと同時代の一次史料となる。

- (2) Pañ chen blo gros legs bzang. "rJe rin po che'i rnam thar rab gsang rmad byung gtam gyi dga ston byin rlobs kyi char rgyun dngos grub kyi gter 'byed rin po che'i 'phreng ba." In *rJe btsun tsonq kha pa chen po'i rnam thar phyogs bsgrigs*. ed. krung go'i bod rig pa dpe skrun khang. 2015. Vol. 1; pp. 482-514.
- (3) Gung ru rgyal mtshan bzang po. (1383-1450) "rJe btsun tsonq kha pa chen po'i rnam par thar pa mdo tsam du bshad pa'i 'grel pa legs par bshad pa'i sgron me." In *rJe btsun tsonq kha pa chen po'i rnam thar phyogs bsgrigs*. ed. krung go'i bod rig pa dpe skrun khang. 2015. Vol. 1; pp. 198-283.
- (4) gNas rnying kun dga' bde legs rin chen rgyal mtshan.(1446-1496) "rGyal ba blo bzang grags pa'i rnam par thar pa dad pa'i 'jug ngogs." In *rJe btsun tsonq kha pa chen po'i rnam thar phyogs bsgrigs*. ed. krung go'i bod rig pa dpe skrun khang. 2015. Vol. 1; pp. 344-442.
- (5) gDan sa thel gyi chos sgo ba 'jam dbyangs kha che. "rJe btsun tsonq kha pa chen po'i rnam thar bstod pa tsonq kha brgyad cu" In *rJe btsun tsonq kha pa chen po'i rnam thar phyogs bsgrigs*. ed. krung go'i bod rig pa dpe skrun khang. 2015. Vol. 1; pp. 594-603.
- (6) Kun dga rgyal mtshan. "bKa' gdams chos 'byung gsal ba'i sgron me." In *Bod kyi lo rgyus rnam thar phyogs bsgrigs*. ed. mtsho sngon mi rigs dpe skrun khang. 2010. Vol. 3; pp. 680-711.
- (7) Pañ chen bsod nams grags pa.(1478-1554) "bKa' gdams gsar rnying gi chos 'byung." In *Bod kyi lo rgyus rnam thar phyogs bsgrigs*. ed. mtsho sngon mi rigs dpe skrun khang. 2010. Vol. 4; pp. 233-255.
- (8) Pha bong kha pa dPal 'byor lhun grub. (1478-1554) *gShin rje gshed skor gyi bla ma brgyud pa'i chos 'byung gdul bya'i re 'dod skong ba yid bzhin nor bu'i 'phreng ba*. ed. dharamsala. 2005. pp. 101-153.
- (9) 'Gos lo tswa ba gzhon nu dpal (1392-1481) "Deb ther sngon po." In *Bod kyi lo rgyus rnam thar phyogs bsgrigs*. ed. mtsho sngon mi rigs dpe skrun khang. 2010. Vol. 15; pp. 541-546.
- (10) 何故ツォンカパ絵伝にボラネーが描かれたかという問題については拙稿「ツォンカパ絵伝に描かれたボラネーについて」『印度学仏教学研究』68-1 [2019. pp. 325-322] を参考されたい。

- (11) 下から順に巨象、獅子、一角の祥麟、小児、鰐魚、竜女、ガルダが積み重なっている。
- (12) ペルデンサンボと、トクデン・チャンセンワ、長老リンチェンゲルツェン、長老サンキョンワのウー地方出身の四人と、師トクデン・ジャムペルギヤムツォ、ゲシエ・シェーラプタク、ゲシエ・ジャムペルタシ、ゲシエ・ペルキョンのドメー地方出身の四人の計八人である。
- (13) 例えば、ターラナータ著の『教主釈迦〔牟尼〕の百御行の作画指示書』(sTon pa Shākya'i dbang po'i mdzad pa brgya pa'i bris yig; 『ターラナータ全集』 Vol: 12) では、あくまで外国であるインドの習慣や文化であることから「釈尊絵伝」の各場面のどこに何を描くかということが具体的に詳しく指示されているが、「ツォンカバ絵伝」の場合、画題や作画構成者の何れもチベット文化圏内の出来事であることからすると、ジャムヤンシェーパードルジェがチベット人の絵師に各場面の素材や構成の内容に関して一々細かく記述する必要がなかった可能性が高い。
- (14) ツォンカバの頭上に文殊菩薩が描かれている点は「作画指示書」と一致しない。
- (15) 筆者が参考した図像資料は、Tucci 1949 第二巻の本文中に援引され、木版本から刷られた作品 15 枚である。それと同時に、チベット・ニューデリーのティベット・ハウスが所蔵するツォンカバ絵伝 15 枚と、王・宗 2017 の木版画を参考に絵解き銘文を校訂した。
- (16) チベットで、一般的に年齢の記述は数え年であるため、ナムカギェルツェンの七十歳は 1395 年である。
- (17) 森雅秀 1996 「パーラ朝の文殊の図像学的特徴」『高野山大学論叢』第 31 巻；pp. 55-87 参考。
- (18) 大羽恵美 2004 「忿怒形の金剛手の図像について」『北陸宗教文化』第 16 号；pp. 67-86 参考。
- (19) メンタン画派の開祖とされるメンラ・トゥントゥブが著した『如来尊像の身体比率を分析する宝石』(bDe bar gshegs pa'i sku gzugs kyi tshad kyi rab tu byed pa yid bzhin nor bu.) の第七章で諸尊像を 10 種類に分析し、それらの身体比率(法量)が詳述されている。その中で、菩薩部の身長(全高)は 120 指量(尊顔量 1=12 指量)で、忿怒部と衆生部は 96 指量であると規定されている。この規定を基にして考えると、この場面上で描かれている各身長には違和感を感じる。しかしながら、作画構成者がここで描かれた文殊菩薩と金剛手菩薩は人間の身長と略う同じく描かれ、本来のツォンカバとナムカギェルツェンの人間姿を残している点は興味深い。特に金剛手菩薩に描かれている両足の動作で、仏ではなく 70 歳の老人ナムカギェルツェンの姿であることが見てとれる。

## 【参考文献】

### 〈一次文献〉

- 『ツォンカバ絵伝作画指示書』 rJe btsun Tsong kha pa chen po'i rnam thar ras bris kyi tshul brgya nga gsum pa cintā ma ni'i phreng ba thub bstan rgyas byed phan bde'i rol mtsho chen po. 'Jam dbyangs bzhad pa'i rdo rje gsung 'bum. Nga. bla brang bkra shis 'khyil edition.
- 『ジャムヤンシェーパードルジェ伝』 'Jam dbyangs bzhad pa'i rdo rje'i rnam par thar pa yongs su brjod pa'i gtam du bya ba dad pa'i sgo 'byed kē ta ka'i 'phreng ba. Ngag dbang bkra shis. bla brang bkra shis 'khyil edition.
- 『バンチェン六世伝』 Blo bzang dpal ldan ye shes dpal bzang po'i zhal snga nas kyi rnam par thar pa'i nyi ma 'od zer. dPal ldan ye shes gsung 'bum. Ka. Bkras lhun po edition. (大谷 No.10532).
- 『ロダクの大行者とお会いになった時の様子』 lHo brag grub chen dang mjal tshul. Tsong kha pai gsung 'bum. Ka. sDe dge edition.

### 〈二次文献〉

- Tucci, Giuseppe. 1949. *Tibetan Painted Scrolls*. Rome. Libreria dello Stato.
- Yon tan rgya mtsho. 1994. *dGe ldan chos 'byung gser gyi mchod sdong 'bar ba*. Paris. Yonten Gyatso.
- 石濱裕美子・福田洋一 2008 『聖ツォンカバ伝』大東出版社。
- 王家鵬・宗緒盛編 2017 『藏族美術集成』 絵画芸術・版画巻 1, 四川民族出版社。

(リサーチンツェラン 文学研究科仏教学専攻博士後期課程)

(指導教員：小野田 俊蔵 教授)

2019年9月30日受理